

# 邪馬台国論

## 2章 『倭人伝』解説

絶対認識を曲げず

### 「奴国」「不弥国」「投馬国」

#### 伊都国から奴国へ

海の玄関口、末廬国から、「東南陸路(国道203号線)」を約50km行ったところに広がる光景は何か。そこは「伊都国」と呼ばれる国である。帯方郡使者はここに留め置かれた。伊都国まで長い旅でした。ひとまず旅の疲れを休めて服装を整えよう。

女王の都に行くには、次の国は「奴国」である。さて、「奴国」はまちがいようがないと思われる。「東南至奴国百里」とある。「伊都国から東南に百里」のところに「奴国」が存在すると解するほかない。

『倭人伝』の旅程は特に難解な書き方をしているわけではない。普通の表記をごく普通に理解すべきである。

帯方郡治 ■■■ 狗邪韓國 ■■■ 対海國 ■■■ 一大國 ■■■ 末廬國 ■■■ 伊都國 ■■■ 奴國

これらの国々は通過していく国々である。末廬国から伊都国へ行き、次に奴国へ行くと読まなければならない。伊都国から女王国へ向かう時、必ず通過する国が「奴国」である。例えば、あなたが伊都国で女王国への道を探ねたとしよう。

“女王国へ行くのですか。では、まず奴国に向かいなさい。”

と、返事される国である。本線に位置する国で、絶対不可欠な国である。「奴国」を通らなければ女王国へは行くことはできない。

「奴国」は佐賀市から東南に百里(約10km)進んだところにあつた大国である。私たちがこの本線を進もう。

まず、方向は東南である。東南とは、伊都国の東南である。方角を曲げてはならない。たとえ、行く手を川が遮ろうと、山が立ちふさがろうと、必ず、東南へ進まなければならない。

伊都国は佐賀市である。佐賀市の東南に「奴国」が存在した。郡使は末廬国からの唐津街道(国道203号線)を東南に進んできた。そして、佐賀市内に入った。伊都国である。郡使はここに駐在していた。

「奴国」への道は佐賀市から東南の道である。卑弥呼の時代に存在した佐賀市と東南の奴国を結ぶ街道は現代も存在している。

#### 奴国

地図で調べてみよう。誰の目にも明らかのように佐賀市から東南に向かう街道が存在する。国道208号線である。この道は佐賀市の中心、佐賀城、佐賀大学、佐賀県庁の南を通って東南に延びている。

「奴国」への道は国道208号線である。『倭人伝』の時代、伊都国から「奴国」への道だけが存在したのではないが、「奴国へ行くには東南への道を進みなさい」、と書き記したのが、「東南至奴国」である。

私たちが佐賀市から東南へ延びる道、国道208号線を進んでいこう。



伊都国(佐賀市)を出て国道208号線を東南に進んで行くと筑後川にぶつかる。その地名は諸富津(もろどみつ)である。つい最近までここに筑後川の渡しがあった。ここで渡し船に乗ることにする。筑後川の中州、大島へ渡る。再び舟に乗り、向島(むかいじま)へ渡る。向島は現在地続きであるが、古代は島だったであろう。また舟に乗って筑後川の東岸大川市の若津に着く。

大川市は佐賀市から東南にほぼ10km行ったところにある。大川市が「奴国」である。「奴国」は「二万戸あり」と紹介されている大国である。大川市だけでなく、久留米市を含む大国だったと思われる。

### 弥生の有明海の海岸線

ここまでの行路に問題はない、と確信していた。ところが、思いがけない問題にぶつかることになる。『倭人伝』に関する原稿を書き上げ、ホームページにアップロードしたのは、2014年2月である。

2年後の2016年10月、私は友人3人と、『倭人伝』旅程確認のために唐津・和久・佐賀市・諸富・石津・筑後市・八女市へと車で旅した。夕方、八女市にはいり、岩戸山歴史文化交流館「いわいの郷」を訪ねた。そこで、若い研究員から思いがけない、当然と言えば当然な問題を指摘された。

彼は、「卑弥呼の時代、大川市は海の下でしたよ。」と。

私の『倭人伝』旅程研究は、現代地図を参照している。ほとんどそれで充分であるが、指摘の如く、問題は現代ではなく、3世紀の弥生時代である。弥生の海はどうなっていたのか。その海岸線認識を『倭人伝』旅程研究の基本に据えなければならない。

振り出しに戻り、しばらく、佐賀地域の海岸線を研究した書物を求めることになった。それがなかなか見つからない。が、感謝します。2018年、インターネットで、次の研究報告を見つけたことができた。

地域地質研究報告 5万分の1の地質図幅 福岡(14)第71号

NI-52-11-9

「佐賀地域の地質」

下山正一・松浦浩久・日野剛徳

平成22年

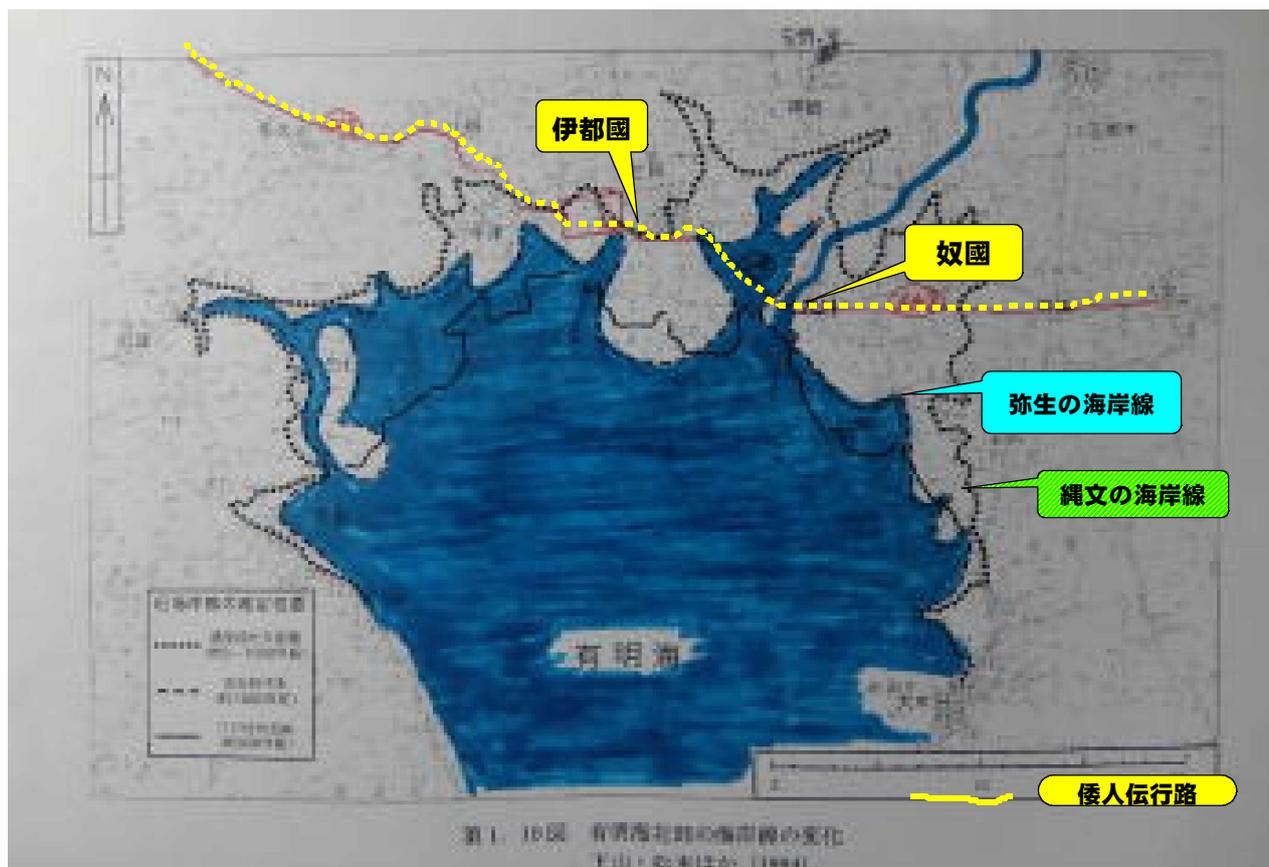
独立行政法人 産業技術総合研究所、地質調査総合センター

研究はA4用紙95頁に及ぶ。第1章は「地形」で、下山正一氏による研究である。その7頁に地形図が掲載されている。

第1.10図 有明海北部の海岸線の変化 下山・松本ほか(1994)

報告書作成は平成22年である。卑弥呼の没年と想定されているのは、248年である。約1800年前といえは卑弥呼の生きた時代である。下山氏・松本氏作成の弥生の海岸線は当時の海岸線と見てよい。

卑弥呼の時代の有明海の海岸線はどうなっていたのか。関心は大川市である。果たして大川市は海の下だったのか。



地形図には「旧海岸線の推定位置」として、上図のように3つの時代の海岸線が示されている。縄文時代(約5～7000年前)の海岸線、弥生時代(約1800年前)の海岸線、江戸時代(約300年前)の海岸線である。

- (1) 大川市は現代とほとんど変わらない陸地であった。

- (2) 柳川市は市役所の西側まで有明海が迫っていた。国道208号線はかつて海沿いの街道だった。
- (3) 佐賀市の南は陸だったが、佐賀市の東側まで有明海が入り込んでいた。
- (4) 『倭人伝』とは無関係であるが、佐賀市の西、牛津は牛の角のように有明海が入り込んでいた。

「東南至奴国百里」は「水行」

大川市は存在した。弥生時代、大川市はすでに陸だった。大川市が「奴国」である。問題はない。だが、思いがけないことに、佐賀市から大川市に到る国道208号線は存在しなかった。国道208号線は海の底だったのである。

「伊都国」から「奴国」への道は水の道だった。南佐賀あたりの港から船に乗り、有明海を東南に下り、筑後川の西岸に上陸、再び筑後川を渡り、石津あたりで大川市に上陸したと考えられる。

「奴国」への旅程には、「陸行」「東行」という「行」という動詞がないと、指摘したのは古田武彦氏である。そこで古田氏は、「奴国は本線上の国ではなく、傍国である」と結論した。だが、この結論は誤りである。卑弥呼の国へは「奴国」を通過しなければ行き着くことはできない。

だが、古田氏の指摘は新たな発見をもたらした。「行く」という動詞を使わない「東南至奴国百里」の道は海の道だったのである。『倭人伝』には水の道が3つある。1つは投馬国への道、これは「水行」と書かれているので分かりやすい。だが、「伊都国」から「奴国」への道も、距離は短いながらも、水の道だったのである。

不弥国



次は「不弥国」である。この国は、「東行至不弥国百里」と書かれている。「奴国」への行程は有明海が佐賀市付近まで侵入していたのもたついでにしまった。だが、「不弥国」への旅はなんら心配はない。ただ東に進む一本道である。

「奴国」と同じように、「不弥国」も必ず通る國である。当時、「奴国」と「不弥国」だけが存在したというわけはなからう。周囲には様々な國が存在していたのは当然である。筑後平野は広い。数多くの古代國が存在した。その中で、「不弥国」を記載したのは、「奴國」の次に必ずこの國を通らなければならないからである。

大川市が「奴国」。大川市から東に行く。東に向かう街道は国道442号線である。

“次は不弥国です。ここからはまた陸路です。東にまっすぐ442号線をお進み下さい”

私たちがこの案内に従って進む。この道は本当にまっすぐ東に一本道である。

百里、約10km進むと、鹿児島本線の羽犬塚(はいぬづか)駅に到る。筑後市である。ここが「不弥国」である。「東行至不弥国百里」は、筑後市である。

## 投馬国

「東南至奴国百里」、次に、「東行至不弥国百里」と進み、次は、「南至投馬国水行二十日」である。「投馬国」は「不弥国」から水行である。ここに、「水行」と特記したのは、この旅程には陸路がないからである。

現在の筑後市には海に面した港はない。水行は不可能である。「不弥国」から南に水行するのは無理と思えるが、3世紀の筑後市の南は有明海だった。筑後市の市役所付近の「前津」あたりから乗船できたのである。



「不弥国」から「南、二十日」の船旅で到着した國が「投馬国」である。船の速度は時速5～6km、一日8時間の航海として、一日に40～50kmほど進むのであろうか。水行二十日、途中、寄港しながら、航海したと考えて、「不弥国」から南のシナ海を約800km～1000km南下した海上に「投馬国」が存在する。

## 投馬国は那覇市

「投馬国」と女王国はお互いに日常的な交流があったのであろう。沖縄には万葉集の語彙が残っているという。新聞記事がある。

「たとえば、琉球方言には、万葉集の時代にあつて、今は失われた言葉が残っています。」

読売新聞2007/7/10 高良倉吉さん「日本文化の源流を求めて」

高良氏は何を言ってるのか。

『魏志倭人伝』の「投馬国」が那覇と判明すれば、卑弥呼の時代の九州と沖縄は繋がる。

女王の国の一つが沖縄だということは、九州と沖縄は同じ言語圏といえよう。万葉集は九州東北部を支配した神武天皇家の歌集である。女王国と神武天皇家の間には交渉があった。琉球方言の中に万葉集の歌言葉があつて当然であろう。沖縄は自立した歩みを続けたので、万葉の時代の言語が保存されて来たのだ、このように高良氏の研究を理解することができる。

「南至投馬国水行二十日」とは、沖縄那覇市である。

